

連続学習会「憲法ってなあに？」



連続学習会「憲法ってなあに？」が開かれました。市の生涯学習課の管轄する「北茨城市まちなちの寺子屋」の登録講師でもある丹賢一さんを講師にむかえ、私たち「9条の会準備会」事務局も全面的に協力をしました。

市内の公民館などにチラシをおいて参加者を募ったほか、読売新聞や朝日新聞などでも事前に報じてくれました。第1回のような、地域誌「月刊びばじよいふる」でも掲載されました。

第1回が9月29日、第2回が12月2日、いずれも会場は関南町の多目的集会所。それぞれ30数名の参加者がありました。引き続き、第3回以降も継続して開かれる予定です。

No.4

07.12.10

北茨城・九条の会 ニュース

発行：北茨城・九条の会(準備会)

連絡先：46-5611(藤田)
42-2462(鈴木)

<http://www.suzuki31.com/9-ktib>

「北茨城・九条の会」に賛同いただいた皆さんお届けします。お知り合いにも広げて下さい。話題やご意見お待ちしております。

私の戦争体験

連載 ③

機銃掃射、そして焼け野原

小野勇次さん (大正15年2月14日生 高萩市在住)

開戦

昭和16年12月8日朝、ラジオは「大本営陸海軍部午前6時発表。帝国陸海軍部は本八日未明、西太平洋においてアメリカ、イギリス軍と戦闘状態に入れり」と報じました。その日はたいへん寒い朝で、庭には霜柱が立っていました。当時、私は16歳で、現在の東京電力の前身、大日本電力高萩営業所に勤めていました。その放送を聞いて出勤したことを覚えています。

子どもの頃から、「天皇陛下のために」とか「日本は国土が狭いから満州の開拓が必要だ」とか聞いていました。水戸の先の内原に訓練所があって、全国から満蒙開拓に行く人達が訓練に来ていましたので、満州への進出や戦争が始まったことは止むを得ないことと思ひ、疑問は持ちませんでした。

願書取り下げ

私の尋常高等小学校の同級生のほとんどは軍需工業の日立製作所に入りました。電力会社へ入った私は、先生から「どうして電力会社に入るのか」と怒られました。当時は、軍需工場に人を送り出す、将来の軍人をつくるというのが学校の責任というような、そんな時代だったので。

男と生まれれば、三大義務の一つが兵役という時代でした。私は18歳の時に海軍に志願する願書を出しました。それを知った親父は、私が長男だったからと思いますが、すぐに願書を取り下げてきました。親父の友達の中には、私と同級生で予

科練に入った息子さんが戦死した方もいました。親父の行動にはそんなことも影響したのかもしれませんが。

風船爆弾の基地作り

私がまだ電力会社に勤めていた19年4月に、陸軍造兵廠(基地建設などを行う部署)からの仕事で大津町へ行きました。今の五浦の辺りでしょうか、海からも陸からも見えないところでした。

4月から10月まで、電線を張る電気工事を行いました。9月には工事はほぼ終わり、10月には兵隊も来始めていました。しかし、そこは迷彩色が施され、何のための基地かは明らかにされず、周囲は立ち入り禁止となっていました。

たまたま工事中に材料が足りなくて、小高いところにあった材料置き場へ行くと、目の前に大きく膨らんだ風船が見えてたいへん驚きました。それが風船爆弾だったので。

風船爆弾を放流するのは夕方だったと思います。当時、常磐線列車大津港付近を通過する際には、軍事機密を守ろうと目隠しのために窓の鏡戸は下ろされていました。もっとも、周辺

の人達には見えていたのでしょうか、それがアメリカ大陸に向けられていたことまでは分からなかったと思います。

目を覆う大津町空襲

20年4月、郡山を空襲した帰りの米軍B29が大津町上空を通過しました。風船爆弾の基地を守るためだったので、下から高射砲で打ったため、B29は引き返してきて爆弾を落として行きました。このため、大津町は大きな被害を受けました。

私達は五人で電力復旧のために大津町へ入りました。たいへん多くの人達が亡くなったり負傷されて、目を覆いたくなる状況でした。あまりのひどさに、仲間の1人は翌日は仕事に出て来れないほどでした。わたしは当時、まだ軍隊には行っていませんでしたので、そのときに戦争のむごさ、残酷さを初めて体験しました。

「兵隊さん助けて」

昭和20年に、19歳で現役召集されました。赤羽の東部81部隊の工兵で、前日に上京して叔母の家に泊まり、6月10日午前9時に入隊しました。その年の3月10日に東京大空襲があり、東京はすでに大きな被害を受けてひどい状況だったことを覚えています。

工兵ということでしたが、電力会社に勤務していたということで通信関係に回されました。有線通信の任務に就き、7月に入って部隊が九州へ移動しました。いよいよ本土決戦というようなことがあったのでしょうか、鹿児島から福岡へ山岳道路を作るという計画でした。

7月半ば、山岳道路建設の無線機受領のため熊本の師団司令部へ行きました。その移動で列車に乗っているとき、米軍機による空襲と機銃掃射で、乗り合わせた人達が即死しました。列車が緊急停車し、急いで列車の下に潜り込むとき、「兵隊さん、助けて」と声を掛けられました。私達にはどうすることも出来ず、本当に悔しい思いをしました。

長崎被爆のとき

熊本では植木というところへ行っていました。8月9日、西部軍管区情報で「長崎県下全域、全員退避」という指令がありました。兵隊も民間人も全員退避ということですから、初めは何がなんだか訳がわか

らない状態でした。

ただ、小隊と一緒に電気工事に出かけていた11時頃に、長崎方面に異様なキノコのような雲を見ていましたので、その直前の8月6日に広島に落とされた「新型爆弾」と同じではないかということが分かってきました。しかし詳しいことはまったく知らされませんでした。

敗戦・帰郷

終戦の8月15日、私たちは工事のために部隊から離れていましたので、天皇陛下の玉音放送は聞きませんでした。作業を終えて山から下りてみると、経理担当曹長から「戦争に負けたから帰れ」と言われました。

何とも言えない思いで書類などを燃やして処分し、夕方、高萩までの切符を買って熊本の有佐という駅から出発しました。乾パンと米を貰って、それを袋に入れて列車に乗りました。下関への列車がなく、門司駅で夜明かしをしました。

次の朝、門司から下関駅まで出ましたが、東京行は夕方の6時発のため下関で時間をつぶしました。強制労働で日本に連行されていた朝鮮半島の人々が、国に帰るために続々と集まって来てごった返していました。

夕方列車に乗り込みました。小さい子ども連れの家族などでたいへん込み合っていました。そこへさらに切符を持たない兵隊がどんどん乗ってきたので収拾がつかない状況でした。下関の憲兵少佐がやってきて「今から検札する。切符の無いものは降りるように」と言って検札を始めました。それで、切符を持たない者は降りて、やっと6時ごろ出発することができました。

焼け野原

何時間かかったのでしょうか、広島駅には夜中に着きました。私が九州に行く際に通ったときは無傷だった広島は暗闇の中で、建物の跡形もなく、人影もなく、言葉が出ませんでした。ただ駅だけにはポツンと電球が灯っていたことが忘れられません。

それから、時速何kmで走っていたのかわかりませんが、須磨明石海岸を走ったのは昼間でした。そこで水着を着た外国人が泳いでいたことを覚えています。きっと、戦争中も神戸に残っていた外国人だったのでしょう。



「風船爆弾放流地跡 わすれじ平和の碑」
(北茨城市長浜海岸)

東京を間近にして雷雨のために列車が動かず、大船で一晩夜を明かしました。やっと東京に着いたのは、熊本を発つて5日目でした。東京で乗り換えて上野へ来ましたが、やはり上野はなつかしく、そこで高萩がどうなっているか誰彼なく聞きまわりました。高萩も随分やられていることがわかり、心配しました。

上野から水戸へ行き、水戸で一晩泊まって、次の日やっと高萩に帰り着きました。熊本を出てから1週間後でした。駅前一带は焼け野原で本町も西側が残っているだけでした。高萩も7月19日に空襲されていたのでした。

子や孫には...

3年余の間に体験した戦争は、あまりにも残酷でした。子や孫には絶対に味わって欲しくありません。

いま私は、趣味としてカメラを愛好し、身の回りの自然にレンズを向けています。これも平和であつてこそという思いを強くしています。

